中国人の日本観——戴季陶

蘇　　徳　昌*

中國人的日本觀——戴季陶

蘇　德昌

要　旨

戴季陶は孫文に追随し、秘書まで長年勤め、薫陶を受け、孫文に傾倒した。国民党の右派の理論的指導者であり、三民主義を儒教的に解釈し、蔣介石の思想的支柱となると同時に、唯物史観・階級闘争に反対し、共産党との提携にも終始反対した。彼は思想は信仰になってはじめて力になるとの観点から日本論を展開した。日本民族は中国・印度・欧米の文明を千年以上に亘って咀嚼・同化し、独自の文化を造り上げ、特に江戸時代に民族精神を形成し、民族の自信力を付け、明治維新に成功した。食祿報恩主義に過ぎない制度論的武士道から道徳論的武士道、信仰論的武士道、そして旧信仰論的から新信仰論的武士道と、武士道はその内容を拡大・変化し、日本の民族精神となった。彼は中国人と比較しながら、日本人の信仰の真実さ、美意識並びに夫婦関係等を褒めちぎる半面、それが喪失しつつあることを訴え、日本軍閥・財閥の中国侵略政策を猛烈に糾弾した。彼の「日本論」は中国人日本研究の白眉である。

Ⅰ．はじめに

20世紀後半の50年は中国共産党が世界人口の５分の１を占める人々が居住する広大なユーラシア大陸の東部で政権の座に就き、というよりも正確には政権を武力で手中にし、その政権を小から大、弱から強、不安定から安定なものにしていった半世紀であり、ロシア・東欧共産圏等所謂社会主義陣営の国々が一つ一つ崩壊して行き、アメリカを頭とする所謂資本主義陣営が世界全体にその縄張りを拡げる中で、大国として唯一つ中国だけが社会主義体制とプロレタリア階級独裁、つまり共産党独裁の旗幟を引き続き翻し、見事に脱皮・換骨奪胎・変身して、堂々と資本主義陣営に立ち向かい、その存在を不動のものにするどころか、益々重みを増して行った50年であった。そして、この流れは恐らく21世紀に於いても変わることはないであろう。

中国共産党がここまで成し得たその原因は色々考えられるであろうが、少なくとも以下の三つは挙げられる。

一つは共産党は都市部・農村部・全国の津々浦々、政治・経済・文化・社会等の全分野、立法・行政・司法等国家の全権力、末端から中間・中央に至るまでの全組織に浸透し、各地・各

平成14年８月20日受理　*教養部

分野・各権力・各組織の核となり、それ等を指導・監督・管理する立場にあるような、基盤の厚い、高度で強固な、効果的で完璧な程の中央集権のシステム・体制を作り上げ、国民全体をその支配下に置き、従来言われて来た「眠れる獅子」を目覚めさせ、獅子奮迅の奮闘努力をさせつつある[1)]。

その共産党は6000万人以上の党員を擁し、今でも毎年入党者が何百万人に上り、後を絶たない、優秀な国民・エリートの集団である。労働者・農民・軍人だけでなく、知識人・文化人、乃至成功した私営企業の実業家・起業家まで含まれている、いわば国民の「前衛」である。共産党は次から次と時代に即し、国民の要望にも応えられるようなビジョン・方針・政策を打ち出し[2)]、旗手然としているだけでなく、民主集中制という組織原理・鉄の規律で自らを引き締め、各民族、各階層、各職種からなる党員を一つに纏め、一枚岩まで行かないにしても、決して砂丘ではない組織を保っている。

一つは軍や警察等は完全に共産党の支配下にあり、天下を勝ち取るのも、天下を治めるのも結局は武力によるというのが共産党の信奉するところである。特に中国共産党は1920年代から農村部に根拠地を作り、日中戦争では日本軍の後方からゲリラ戦で日本軍を大いに悩ませ、国共内戦ではその名の通り、国民党軍と戦い、都市部を包囲し、遂に天下をものにした。そして、戦争をやりながら、遊撃隊から正規の部隊、三八式歩兵銃から大砲と武装し、武力を拡大して行った。兵士は農民であり、中国軍は農民軍である。共産党はその農民の利益をいつ何時でも忘れたことはない。だからこそ、プロレタリア大革命という内戦の時でも、天安門事件の時でも、軍は共産党の命令に従い、涙を飲みながらでも銃を身に寸鉄を帯びない学生に向けたのである。軍にとって、共産党は絶対であり、共産党にとっても、軍は絶対である[3)]。

一つはマスコミの掌握とコントロールである。最大の全国紙「人民日報」は中国共産党中央委員会の機関紙であるし、各地方の代表的な新聞も全部共産党地方委員会の機関紙である。雑誌・図書等の刊行物も当該委員会宣伝部の実質的な検閲を受ける。発売禁止・廃刊する権限は宣伝部にある。テレビ・ラジオ・インターネット、全て共産党の管下にある。唯一の通信社である新華通信社の社長等の幹部も共産党員一色であるし、中央委員会からよく権限を授けられて世界・国内の重大な問題に対して、声明を発表する。要するに、中国政府のスポークスマンである。共産党に不利な情報は国民の目や耳に届かないし、国民の宇宙観・世界観の拠り所とする「客観」は共産党が描いたものであり、共産党の「主観」であるに過ぎない。その「主観」に合わないものは、たとえ事実であってもデマと見なされ、抹殺される。国民に知る権利等ないのである。

一番徹底しているのが教育である。国民にはマルクス主義・毛沢東思想・鄧小平理論・江沢民の「三つの代表」説を学習し、それで以て洗脳する義務がある。社会人になり、働くようになった者は職場で業務会議の他に、週に1回の政治学習会があり、毛沢東時代は又毎年のように政治運動が展開され、国民はそれに翻弄された。学校はそれに正規の政治のカリキュラムが加わる。全学年に必修科目としてあり、大学院になっても続く。中国現代革命史、中国共産党史、ソ連共産党（ボリシェビキ）史、マルクス・レーニン主義基礎、マルクス主義の政治経済学、マルクス主義の哲学、唯物論弁証法等々で、マルクス・レーニン・毛沢東の原著も随分読まされ、「矛盾論」・「実践論」等相当の箇所が暗誦できる程である。中学校、高校、大学、大学院の入学試験

で、理工系であろうと、文系であろうと、全員受けないと行けないのが政治科目である。マルクス主義以外のものは始めから批判の対象として触れこそすれ、肯定的或いは一歩譲って客観的な資料として系統立てて習うことはできない。

国民の目に入る活字・映像、耳にする音声、手に触る物、体感する感覚等全てが共産党お墨付きのものばかりである。私は12歳から57歳までの、人生の一番大事な45年間を上海・北京・杭州という共産党の環境で送った。好むと好まざるとに拘わりなく、当然のことながら、共産党の思う壷にはまり、骨の髄まで共産党的な人間になってしまった。

先ず自分自身や周りの人を見る目である。人間に人間性なんてあり得ない。人間にあるのは只生産関係の中に於ける、土地や工場等の生産手段を所有するかしないか、そして雇用する側か雇用される側かに拠って決まる階級の階級性だけである。地主・資本家はものを持ち、人を雇う。農民・労働者は何もなく、雇われて働く。前者は後者を剰余価値で搾取・抑圧する。だから、前者は悪人で、後者は善人である。後者の内、特に大企業・大工場で働く産業労働者は優秀で、そのプロレタリア階級の前衛が共産党であるので、共産党員はスターリンが言うように、特殊な材料からできているスーパーエリートとなり、リーダーになる資格があるということになる。

働くといっても、汗水垂らして働く肉体労働こそ本物の労働で、口だけを動かす頭脳労働は偽物に近く、亜流で、私のような大学で教鞭を執る者は、土地も資本も財産もないのに、ブルジョア知識人になる。階級性から言えば悪人である。私の父も大学の人間であるから、私は生れつき悪人である。

労働者であれば、人間としての屑でも、資本家或いはブルジョア知識人の優秀な人材に勝るということを目に痛い程見せつけられ、自分もそれを経験した。

だからといって、悪人のままで怠けていられるのかというと、そうではなく、常にプロレタリア階級の立場・観点・方法で自己改造に精を出すよう強制された。政治（中国語で「紅」と言う）が絶対的優位に置かれ、仕事や勉強（中国語で「専」と言う）は二の次になり、「紅専関係」で人々は悩み、とにかくカーキ色の軍帽をかぶり、軍服を着、赤色表紙の「毛主席語録」を手にし、口で声が嗄れるまで「毛主席万歳！中国共産党万歳！」を叫び、何の実力も教養もない政治屋でいれば無難であった。

次に世の中を見る目である。世の中、と一言で言っても、政治・経済もあれば、文化・社会等色々ある。どれを取ってもみな人、それも一人ではなく、みんなでやることなので、結局は人間関係ということになる。人間の本質は階級性にあり、差異があれば矛盾があり、対立となり、闘争、つまり階級闘争となる。闘争は絶対的であり、協調は相対的である。人民と非人民の矛盾、人民内部の労働者階級とブルジョア階級との矛盾は常に存在し、闘争は避けられない。それで、人間関係は敵か味方かということがポイントになり、国のレベルでも、社会主義国は友達で、資本主義国は敵国となる。

ソ連共産党が修正主義化してからは、世界は米ソ超大国からなる第一世界、英仏独伊日加豪諸国は第二世界、その他の後進国は第三世界という三つの世界に分けられ、中国は第三世界に身を置き、リーダー然として振る舞った。

経済的に遅れ、国民の生活は貧困そのもの、文化は過去を全部否定しても、政治的には最先進

国と言って、自己満足せざるを得なかった。

第三に歴史を見る目である。私は中学校の時から物理が好きで、大学・大学院では流体力学を専攻したが、ニュートンの運動の3法則は忘れても、忘れないものが三つあった。上部構造と土台、生産力と生産関係、意識と存在である。共産党の篩にかけられるか或いは焼直しされるかした後の歴史というものはこれらを立証する材料に過ぎず、視点はどちらかというと、経済的構造、生産手段の所有、モノの方に向きがちで、原始共同体・奴隷制・封建制・資本主義・社会主義という五つの生産関係が頭にこびり付いていた。運動が絶対的であるように、生産力の上昇も絶対的で、それと矛盾する生産関係は破壊される。それが革命であり、階級闘争で、歴史の原動力となる。だから、歴史といったら階級闘争の歴史ということになる。社会主義になっても、革命は続けて起こる。毛沢東が言うように、特に中国人は喧嘩、争い、闘うのが好きだから、革命・階級闘争は何時までも引っきりなしに起こる。というようなことしか知らず、千変万化、豊富多彩な歴史は見えなかった。日本に「論語読みの論語知らず」という言い方があるが、中国人は「孔家店打倒」を叫び、孔子を蔑視して「孔老二（孔子は次男坊であった)」と呼びながらも、実は孔子や孟の何も知らないのである。毎年10月1日建国記念日の際、北京天安門広場に孫中山の肖像画が掲げられるが、孫文の連ソ・容共・農工扶助の三大政策は知っていても、肝心の三民主義の三つの「民」を全部言える中国人が果たしてどれくらいいるであろう。

そんな矢先に出会ったのが戴季陶の「孫文主義の哲学的基礎」で、一気に読み終わり、目から鱗が落ち、溜飲が下がる思いがした。今まで知っていたのは中国や世界の半分でしかなく、残りの半分、或いはその半分の方が真に近いかも知れないが、とにかくその半分が見えてきた。そして、彼の中国民族や文化、思想、政治を見る目を通して、彼の視点が民族の精神、民族の自信にあり、中国民族の精神は儒教にあるということが分かった。彼はその視点で又日本を見、「日本論」等数々の日本観に就いての著書や論文を発表した。本稿はその日本観の考察である。

Ⅱ．戴季陶その人

1．孫文の秘書

1911年辛亥革命で2000年も続いた封建王朝は倒れ、1912年1月1日中華民国が成立し、孫文が臨時大統領に就任した。間もなく、北洋軍閥袁世凱との取引で、孫が臨時大統領を辞任し、袁が跡を継いだ。孫は袁を南京に迎えるために蔡元培を始めとする代表8人を北京に行かせたが、戴季陶がその一人に選ばれた。その前の年に、孫が欧米から上海に戻って来た時に、戴は中国同盟会会員及び記者として孫には会っているが、知られるのは今回が初めてであった。戴は北京で袁に会って、ちょっとしたことで袁の野心と陰謀を見破り、南京に戻り次第、それを暴露した。時24歳であったが、彼の眼力の鋭さが分かる。

その年の9月孫が全国鉄道の建設に関わるようになってから、戴は孫の機密な仕事を担当する秘書になり、3カ月以上毎日孫に会い、その話しを聞き、最後に民国政治綱領・銭幣改革概要の2冊に纏める。

1913年11月二次革命勃発後、孫は台北経由で日本に渡るが、戴も孫に従い、日本に行く。その

時から亡くなるまで10年以上もの長期間に亘って孫の記録係を担当する。その間、孫は軍事教育を行なう浩然廬や政治法律学校を設立したり、国民党を中華革命党に改組したり、国内での袁世凱討伐を指導したりするが、彼は孫の下で献身的に働く。1916年3月、孫に付いて帰国するまでの2年間、孫の関係で日本の上流社会によく出入りし、多くの知人を得るだけでなく、日本の国情に精通するようになる。日本の国民党の犬養毅の選挙活動にも協力し、各地で演説をする。多い時等、1日に何十回もやったという。

1917年6月、彼は孫の命を受け、日本に赴き、陸軍参謀次長田中義一中将や海軍軍令部長秋山貞一中将に会い、張勲復辟に協力しないよう工作する。

同年8月、孫が南下し、広州に大元帥府を設立。戴は法制委員会委員長に任命され、翌年4月大元帥府の秘書長や外交部次長も兼任する。

1919年5月、北京に五・四運動が発生するや、上海にも波及し、大ストライキが今にも起こりそうな危機一髪の状態にあった。それを契機に彼は労働時間の問題に積極的に取り組み、温和な社会的思想での労働者教育・指導に力を入れ出した。彼の孫文との対談の中で、彼は次のように述べている[4)]。

「一つは中国の工業はほとんど発達していないし、社会の階級もはっきり形成されていない。一つは中国人は政治に対し、もともと近代的な感覚に欠けている上に、何年間かこの方、政治の紛争が激しく、誰も国民と密接な関係のある民生の問題等に関心を持たない。一つは大半の労働者は教育等受けたことはなく、何十人に一人も読み書きのできる者がいない。故に、彼等には階級的な自覚はかけらもない。一つは工業を経営する資本家は近代社会の思潮の常識が全然ない。たとえ一人か二人、ほんのちょっとでも分かっている者がいるにしても、このような思想運動の発生を望んでいないどころか、発生しないよう願っている程である。以上のようなことが原因して、中国にこの問題に注意している者は本当に少ない。……組織されていない、教養もない、訓練も受けていない、準備もしていないストライキが頻繁に起こることは大変危険なことであるし、労働者自身にとっても不利なことである。但し、今回の状態から見ると、労働者は政治的な社会運動に参加し始めている。若しも知識や学問がある人がこの問題に取り組まず、ほったらかしにして置き、思想的知識的に彼等を指導しなかったら、この流れがどんなに非合理で、時宜に叶わない方向に向かうか、それこそ非常に危険である。」

孫はその姿勢を評価した後、こう話している。

「我々が中国を改革する主義は三民主義である。三民主義の精神とはこの上になく平和で、自由で、平等な国を造ることであって、それは政治の上で民権の平等を謀るだけでなく、社会での経済的な平等を謀ることでもある。このようにして始めて種々様々な階級的衝突や階級闘争の悩みを避けることができるのである。だから、我々は経済では商工業の成長発展を図ると同時に、労働者の経済的な生活の安全と幸せを図る訳である。」

私の記憶では近代に於いて、中国の知識人が右に向かうか左に向かうかのその分かれ目は五・四運動にあり、たとえ始めは新文化運動に参加しても、結局は学生運動・労働運動に対する態度で二分した。対談の次の件でその年30歳の戴季陶が右に属するということは明らかである。

「今現在のこの時代の思想の混乱は極致に達している。中国のこの世界の思潮の動揺の中で動

揺するのが避けられないことは分かるが、心配なのは中国の知識のレベルがあまりにも低いということである。普通の人は世界の思想の体系に詳しくないし、理解することもできない。ところが、扇動を企む奴等が生半可な、訳の分からない社会主義共産主義を知識のない兵士や労働者のところに流布しようとしている。この何日かの新聞に、軍に兵士心得と銘打った小冊子が出回っているという記事が出ているが、正にそれである。若しも意識してかどうか分からない扇動が功を奏して動乱にでもなったら、それこそ収拾がつかなくなる。」

1919年3月、孫は上海で建設雑誌を創刊するが、彼はその編纂に協力する。と同時に、孫に言われて、中小学校教育問題を研究し、その教科書の編集に参加する。

1920年11月に、彼は孫に付いて上海から広東に向かう。12月に孫の命を受け、浙江省奉化に行き、蔣介石南下の説得に当る。その後、彼と蔣との間の文通の中に次のような件があるが、注目に値する[5]。

自分は学究の徒であり、今回広東省のために何万言かに上る法律の案を書き上げ、現在も幾つか検討中であるが、蔣は自分とは違う。「貴兄の活動範囲は直接実務を担当するにある」と書き、山奥の田舎から都会、革命の最前線に赴き、国事に身を投じるよう促している。

蔣が革命の第一線に立ち、直接指揮を執るのに対し、戴は側で軍師として働き、その理論的支柱となるという構図はこれを始まりとして一生続くのである。

1922年10月、彼は孫に派遣され、孫の代表として四川省に赴く。当時四川省は各軍閥の混戦、各党派の紛争状態にあり、平和統一を図り、実業を発展させるのが急務であり、省憲法の制定が待たれていた。

彼はもともと精神衰弱の病にあり、四川省の調停もうまく行かない上に、恋愛事件に巻き込まれ、精神恍惚状態に陥り、四川省行きの船が湖北省の宜昌に到着する前日の9月21日の深夜、遂に揚子江に身を投げ、自殺を図る。漁師に助けられ、一命を取り戻す。時33歳である。

1923年1月、孫は中国国民党を強化しようとして、彼を20名から成る参議に任命し、10月には更に改組5委員の一人に任命する。12月に、孫が中国共産党と提携し、全国代表大会を開催し、彼を臨時中央委員に任命することを知り、反対する[6]。

政策の基本に於いて受け入れられない。特に借款の件には大反対である。ほんの少しの借款で、事ある毎に、常に足を引っ張られるようでは国民党にとっては決して幸せなことではなく、他日必ず国民党は乗っ取られ、挽回できなくなる。

「一、絶対に借款までして党費を捻出することはやってはいけない。つまり、借款するなら、昔我々がやったやり方でやり、絶対に自由で、制約をされないようにすべきである。

一、共産党員が入党する際に共産党の党籍を留保してはならない。二股掛けは許されない。他日紛糾になる禍根を残さない。

一、自分は絶対に中央委員にならないし、代表大会にも出席しない。一出版社か新聞社の事業に専念したい。」

と言って、わざわざ広東から上海に説得に来た廖仲愷を困らせる。

結局は又孫に催促されて、1924年1月に、広東に行き、中国国民党第1回全国代表大会に出席せざるを得なくなり、中央執行委員に選ばれてしまう。そして、続けて開かれた第1回中央執行

委員監察委員会議にも出席し、廖仲愷・譚平山との3人から成る常務委員及び宣伝部長に選出されると同時に、孫から政治委員会委員にも任命され、亡くなるまで国民党や政府の中枢に居座ることになる。

同年2月、蒋介石が校長をしている陸軍軍官学校の政治部部長並びに大本営法制委員会委員長を兼任する。

11月、彼は孫に従って、広東を出発し、上海・日本・天津経由で北京入りするが、孫の神戸での有名な「大アジア主義」の講演を直に聞く。

1924年3月11日、孫文が汪精衛が起草した遺言に署名する時、枕元におり、他の8人と共に遺言に立会人として署名する。孫文はその後間もなく逝去した。

2．国民党の要人

孫文亡き後も戴季陶は国民党や政府の要職に就き、指導する立場にあった。

1925年7月、国民政府が成立するや、彼は国民政府委員に選ばれた。

1926年1月、中国国民党第2回全国代表大会で西山会議のかどで、3年以内に文章を書いてはいけないとの警告処分を受けるが、やはり中央執行委員に選出される。その夏、広東大学長に任命され、中山大学に改組された後も学長を続ける。その間、学内秩序の回復、特に共産党徒党の整理に力を入れる。過労のせいもあり、12月に香港に向かう途中又もや海に身投げし、自殺を図ろうとするが、助けられる。

その年の6月に、蒋介石は国民革命軍総司令に就任し、7月北伐が始まる。

1927年2月14日から3月31日までの1カ月半、中国国民党中央政治会議の決議により、彼は赴日代表として日本に派遣される。日本の朝野、政府・民間で計64回もの講演を行い、中国に対する武力侵略の方針を放棄し、中日両国国民の親善を民族平等、人道、正義、平和合作の基礎の上に置くよう呼び掛け、中国国民の国民革命運動の真意を日本国民に伝え、了解を求める。ここからも分かるように、戴季陶は国民党の対日政策の最高責任者でもあるのである。

1927年4月、国民党工人部長に就任。

9月、国民政府の改組に伴い、再度国民政府委員に選ばれる。

この年は中山艦事件、四・一二クーデター、共産党員粛清運動等が起こり、国民党と共産党が袂を分かつ年でもある。

1928年2月、国民党中央執行委員会常務委員会に選出され、宣伝部長に任命される。3月には、国民政府軍事委員会政治訓練部長、8月には中央政治会議委員、そして、10月に国民政府委員、考試院長に選ばれる。以来20年、考試院長の職に就く。孫文と言えば三民主義・五権憲法と言われるように、行政院長・立法院長・司法院長・監察院長・考試院長の五つは国民政府の最重要ポストである。

1929年3月、中国国民党第3回全国代表大会で秘書長を務め、中央執行委員・同常務委員・中央政治会議委員に選出される。

1930年4月、第1回全国運動大会が開催され、彼は会長に選ばれる。

1931年9月18日、満洲事変勃発。国民党は対日事項を専門的に検討する特種外交委員会を設け

るが、彼は委員長に任命される。彼は2・3カ月も国内外の複雑な時局を観察・分析し、日本は東北3省を完全に占領するのが目的で、国連も英仏米も日本の軍事行動には反対であるが、今のところは対日参戦はしない。日本国内の反軍部の勢力は西園寺牧野元老派・山本財部等海軍派・金融界全体・中国中部南部と貿易をやっている全ての業界・欧米と貿易上密接な関係にある全ての業界を含めて全部軍部とは利害関係が違うし、このまま行けば日本の経済は破綻する恐れもある。今でこそ軍部の挙国一致の威力に屈服しているものの、軍部の東北武力侵攻には反対である。いずれ軍部の策は尽きる。反軍部勢力が政権の座に就く時がきっと来る。その時こそ中日の間でまともな外交交渉ができる時であり、必ずや外交的に解決できるであろう。現在は必要あらば軍事上なるべく自衛に回り、民間の断固とした抵抗を見守り、将来に於ける外交交渉の準備を今からやるという三つの面での対策を提案し、国連に頼り、国際世論に訴える方針を打ち出し、具体的には次のような結論を出し、中央政治会議に報告するのである[7]。

「中国の対日交渉は国際的には必ずや最後の勝利を勝ち取るであろう。現在全ての政策は民心を団結させ、人民の政府に対する信頼を保持することを根本とすべきである。対外の策略は、第一に、何があろうと、決して先に対日宣戦をしない。第二に、何としてでも、各国の我が国に対する好感を損じてはならない。第三に、何としてでも、実際的な利害関係を顧慮すべきで、万が一軍事上民意を重んじるが為に犠牲になるにしても気にせず、真実の代価を取得するよう努力すべきである。」

この方針に基づいて、中国はそれから10年後の1941年12月8日、日本が真珠湾を攻撃し、アメリカが即対日宣戦し、太平洋戦争が勃発してはじめて、12月9日に日本に対して宣戦布告をするのである。

というふうに、中国国民党・国民政府の対日政策・方針はこれで決まる訳である。

1931年11月、中国国民党第4回全国代表大会で、中央執行委員に選出される。

1932年1月上海第1次事変勃発。国民政府は「攘外する前に先ず安内」という方針を決定し、共産党根拠地包囲殲滅、討伐に力を入れる。

1932年4月、彼は何応欽と共に中国童子軍総会副会長に選ばれる。会長は蒋介石である。戴の指導・関心の下で改訂された童子軍の規律は彼の道徳観をよく表しているので、次にかいつまんで記しておく[8]。

誠実・忠孝・助人・仁愛・礼節・公平・服従・快楽・勤倹・勇敢・清潔・公徳

1935年11月、中国国民党第5回全国代表大会で、中央執行委員に選出される。

1936年4月、ベルリンで開催される第11回オリンピックに出席する中国政府代表に選ばれる。

1938年4月、中国国民党臨時全国代表大会後の中央執行委員会の総会で、常務委員に選ばれる。

1939年2月、国防最高委員会常務委員11名のうちの1名に選出される。

5月、三民主義叢書編纂委員会委員長に任命される。

11月、中央執行委員会常務委員会委員に選出される。

彼は20年も前から中小学校の教科書に関心を持っていたが、ここに来て、各科目の検定教科書の問題点を指摘し、特に国語は修身と合併し、四書五経を重要な教材とすべきであると提唱す

る。

彼はインドのガンジーやタゴールの著作を翻訳紹介したことがあるが、ガンジーを中国語で「甘地」と訳したのは発音が似ているというよりも、むしろ意味の方を取り、大願地蔵菩薩王と同じように、「甘んじて地獄に落ち、衆生を済度する」というガンジーの一生とその志を褒め称えるためである。1940年10月、彼は中国国民党の命で、1ヶ月余りインドを訪問し、その間世界摩訶菩薩学会総会に出席し、総会主席に選ばれる。

彼はインドとの関係を非常に重視しているが、扱い方も慎重である。彼の1939年8月11日に陳伯稼宛の手紙からもそれが見て取れる[9]。

「インドは今日に於いても未だ英国の属地であり、当該帝国にとっては命の綱である。それに我が国の今日の地位、政府の置かれている立場が大変苦しい。民族の未来永劫の定めから、インドの国民と手に手を携えて行かなければならないと同時に、国際間の当面の利害関係も考慮せざるを得ない。何年か前に、国際大学に図書館を寄贈したのも、中印学会を設立したのもみなそのためである。絶対に政治を絡めてはならないし、学界間の連絡も交流も極めて慎重にする。あまり派手に宣伝しない。会員もあまり増やさない。というようにしたのもみなそのためである。国内の思想状況や世論は非常に複雑である。大学の教授や学生も大局をわきまえない者が多い。少しでも気を付けないと、日本に利用されるか、共産党に利用されてしまう。それだけでなく、英国乃至フランス・オランダ等植民国の妬みを招く恐れがある。そうすれば、当面の国際活動や戦時国際的な援助にも影響しかねない。」

1947年11月、国民大会代表に当選する。

1948年6月、蒋介石初代総統に就任。彼を国史館館長に任命する。

戴季陶は国民党・国民政府の最も重要なリーダーの一人であり、最高意思決定機関の一員で、主に幹部の養成や宣伝・労働運動・教育・体育等の分野を担当したが、法制・外交、特に対日外交では最高の責任者であった。蒋介石の思想的支柱・軍師であり、彼自身が言っているように[10]、「政府の実務のポストに就く当局者そのものではないけれども、結局は政治上主なメンバーの一人」で、蒋介石・国民党・国民政府内に絶大なる影響力を持っていた。

3．反共の闘士

戴季陶ほどマルクス主義・ソ連・中国共産党を知りながら、共産主義・共産党に反対した人はいないであろう。彼は正真正銘の儒教徒であり、彼の反共的感情は骨身にまで沁みており、共産党の勢力拡大を恐れ、最後は中国国民党・蒋介石のあまりにもの情けなさに絶望し、「身を殺して仁を成し」たと言っても決して過言ではない。

彼は孫文の言う、「民主主義とはつまり社会主義であり、又の名を共産主義と言い、即ち大同主義である」、「共産主義は民生主義の思想であり、民生主義は共産主義の実行である」に対して、次のように解釈している[11]。

「一、民生主義の目的は共産主義と全く同じである。何故かというと、共産主義と三民主義の解決しようとしている問題は同じであるからである。

二、民生主義は性質から言って、共産主義と全く同じである。何故かというと、共産主義も

三民主義もみな国境は関係なく、世界全体を主義実行の対象としているからである。

三、民生主義と共産主義の哲学的基礎は全然違う。共産主義は非常に単純にマルクスの唯物史観を理論の基礎にしているのに対して、民生主義は中国固有の倫理哲学及び政治哲学の思想を基礎にしている。

四、民生主義と共産主義は実行の方法が全く違う。共産主義はプロレタリア階級の直接の革命行動をその実行方法にしているが故に、階級の独裁で階級を打破することを主張する。民生主義は国民革命の形式で、政治を建設する上では、国家の権力で以て目的を達そうとする。故に、革命的独裁を主張し、各階級の革命勢力で階級勢力の拡大を阻止し、漸進的に階級を消滅する。」

袁梧江が陳天錫宛の手紙にこう書いている[12]。

「私は民国13年から何年も戴先生に追随したが、私たちはよく国民党と共産党の思想の違いに就いて話し合った。先生は共産党の言論行動には憎悪そのものであった。」

中国国民党第1回全国代表大会では孫文の提議に基づき、容共の政策を執ったが、国民党内の認識が一致するには及ばず、いざこざが絶え間なく起こった。戴はその原因は国民党内に相容れない二つの中心があるからであると見ていた。国民党の問題は山積しているが、その他の問題は部分的な争いか一時的な問題に過ぎず、この二つの中心の問題こそ問題の根本であり、これが解決できなければ、他の問題は解決できない。主義思想と組織・人事の問題がその一番の問題である。このようにごちゃごちゃしている組織はたとえ上智がいてもどうしようもない。と、蔣介石宛の手紙に書き、続けてこう述べている[13]。

私は譚平山君にこう言いました。「今日最も奮闘努力できるのは青年であって、そのうちの大多数は共産党員です。国民党の古参党員が堕落しているか怠けているのは明らかな事実です。然し、今日中国が必要としているのが強大な国民党であるということは共産党の人々も認めるところです。若しも現在共産党員の同志たちがその党籍を犠牲にし、正真正銘の国民党員になり、国民党内に同時に二つの中心が存在するという事態に至らしめなければ、全ての紛糾は解消できるでしょうし、組織関係のことも邪魔されないで済むでしょう。」と心に積もる思いを打ち明けて頼みましたが、「それは絶対にできない。国共の合作が何時まで続くかも予想することは甚だ難しい。でも将来何時かは必ず袂を別つであろう。今共産党員にその党籍を捨てろというのは無理なことで、できない相談である。」ときっぱり断わられました。私は国民党の前途に益々悲観的になりました。「昔日の同志は目を覚ましてくれないし、みんなと一緒になろうともしない上に、怠けています。それに対して、共産党の方は勢力の拡大発展を図り、止まるところを知りません。国民党の基本政策ははっきりしていません。組織に二つの規律が存在する危険があり、宣伝に二種類の理論が存在する困難がある。というようなことになったのは、私のせいではなく、私が喜んで受ける状態でもなく、私に解決できることでもありません。我を利用する者は利用し放題、我を攻撃する者は攻撃し放題です。普通の党員はこの種の問題を全く知らないし、昔日の同志はこの問題の根幹になるところにれっきとした見解を持っていません。私もいい加減に目をつぶればつぶれないことではありませんが、はっきりと問題の所在がどこにあるか分かっていながら、わざと知らない振りをすることができますでしょうか。」国民党を救う手は一つしかありません。基本方針を決め、党員全体が全力を尽くしてそれを実現する。そうしてこそ、国民党や政府を強

固なものにすることができます。この方針は何かと言いますと、総理の全部の主義と主張を国民党の揺るぎない信仰とすべきです。私は第3期中央執行委員会総会でそれを主張しましたが、受け入れてもらえませんでした。所謂右派の同志たちは愚直そのもので、この方針は共産党に有利なものだ等と言っては反対するし、共産党の方では遠大な識見のある者はこの一つの思想を中心に据えてしまったら、国民党は今後自分自身の独立した思想をその基礎にすることになり、共産主義の思想に同化されなくなると見、この主張をつぶすのに躍起でした。

蒋介石もこう回顧している[14]。

「共産分子とそのシンパは唯物論や階級闘争理論によって三民主義を曲解し、三民主義をマルクス主義的に解釈してこそ初めて三民主義は革命思想といえるのであって、国民党員の三民主義に対する正しい解釈は“非革命”または“反革命”だと主張した。そのため国民党宣伝部長戴季陶と青年部長鄒魯は共産分子から排斥され、憤激の末広州を去った。」

三民主義自体に左と右からの解釈を許すものがあるのかどうか、正しい解釈とはどんなものなのかは別として、当時戴季陶が中国や国民党のことを憂慮し、何とかして国民革命を正しい方向に導き、勝利に至らしめそうとしたその努力は評価すべきであるし、マルクス主義が20世紀に猛威を振るい、中国革命も含めて共産党の奮闘により、国民を搾取・抑圧から救い出しはしたものの、近代化を大々的に遅らせ、国民を貧困のどん底に陥れたその歴史上の功罪を考えると、20世紀末になった今日に於いても罵詈雑言で人を殴り付ける横暴なやり方[15]は滑稽にしか見えず、彼への毀誉褒貶を客観的に冷静に分析し、大所高所に立つ観点から、正しい結論を下すべきであり、今こそ「蓋棺論定」の最適の時期である。

1925年6月に、彼は著書「孫文主義の哲学的基礎」を刊行し、7月に続けて「国民革命と中国国民党」という著作を発表する。共産党及びコミンテルン派遣のソ連人顧問M.M.ボロジンがかんかんになって怒り、彼を倒さなければ国民党は政権奪取が不可能であるとか、人身攻撃も惜しまず、自殺は結果を疑うことであるが、彼はその自殺さえも疑っているから最大の悪魔であるとか、共産党の大敵であり、必ず死地に追いやらないといけない等と口角泡を飛ばして罵った。

1936年12月、西安事変発生。国民党中央は緊急会議を開き、対策を講じようとしたが、何時間の間に誰も具体的な意見を出さない中に、戴が立ち上がり、国民党は厳正とした姿勢を示すべきであり、討伐を力説したのは有名な話しである。

1937年日中戦争の戦火が広がる中で、南京を離れる前日に彼は四川省の政治家たちと会い、涙をこぼしながら、この戦争には絶対勝つが、共産党は必ずその勢力を伸ばし、将来は外患より内憂の方が深刻な問題になると言ったという[16]。正に先見の明ありである。

1944年元旦、年始回りに来宅した朱家驊に対して、時局を憂慮している。特に延安が心配である。延安即ち昔の膚施で、張献忠・李自成を生んだ土地であり、今共産党がそこを根拠地にしている。一旦爆発したら、その禍は計り知れないと話したという[17]。

1944年5月、彼は呉鉄城等に手紙を書き、次のように述べている[18]。

「10余年以来、国民党の同志たちは哲学・政治学・法律学・経済学・文学・美術等の分野でやってきた仕事と言えば、半分は似て非なるいい加減なもので、半分はなんといっそのこと共産党のために露払いを演じていながら気が付かない。例えば、最近何年間か、最も重要な政治部がな

んと郭沫若を幹部として起用している。これは何故か。彼が書いた反革命の劇を何故に国民党が大変な金額に上る金を使って宣伝する。又例えば、重慶の中央日報、何故に毎回付録に本当にくだらない白話詩や国民党の思想では許されない小品文など載せるのでしょう。ここからも国民党は今まであまりにも教育や宣伝に注意しなかった。何が利で、何が害なのか。誰が友で、誰が敵なのか。それがはっきりしない。この何年間か一部の同志の考えは混乱していて、意気消沈であり、12、3 年前よりもひどい。この 2 回の大会に於いて、中央の同志は敵のことを全然憂慮もしていなければ、敵のことを何とも思っていないように見える。この体たらくには泣きたくても泣けないし、涙が出ても流すところがない！」

平素から傲慢で恩知らずの日本が負けることはよく口にするが、勝利が果たして誰のものになるかはあまり触れない彼であった。戦時中は艱難困苦に満ちていたけれども、戦後はもっともっと大変で、10倍も百倍も苦しくなるし、危険も想像を絶するものになるであろう。勿論避けられない訳ではないが、要は人心がどう動くか、分かってくれるがどうかの一言である[19]。やはり共産党のことが気になるのである。

1945年 8 月、持病の神経痛が悪化している中で、日本降伏のニュースを耳にしたが、憂慮と恐怖で何日も病床から起きられず、起きても顔に喜びの色はなかった。それから、共産党が全国至る所で戦乱を起こし、その軍が攻め入って来る。国民は戦時中よりももっと苦しい境遇に陥っているのを見ては胸を痛めた。昔太平天国の洪楊を平らげたと思ったら、捻軍の禍が噴出する。今日本が降伏したと思ったら、共産党が暴れ出す。正に捻軍当時の時局と変わらない。もっとも痛恨に堪えられないのは、赤眉黄巾から黄巣闖献髪捻に至るまで、その勢力が如何に拡大しても、人民の心の中には何が是で、何が非かという判断力があった。匪賊を正当な人物と見たり、匪賊の言論を正当で、筋道を立てた議論と見るようなことは断じてなかった。ところが、今日は共産党を合法的な団体と見、その人間を社会の賢明な人士と見るようになり、趨勢や人心がこのように不正では、天下の人々をして匪賊に走らせないでいられようか。自分は10何年前から、日本は怖くない、怖いのは内政がしっかりしないことだ、と思っていた。今正に大乱が始まった。どうしたらいい、どうしたらいいだろう。と、悩み苦しんだ[20]。

1949年 2 月、共産党軍が破竹の勢いで中国全土を席巻し、国民党軍が敗北に帰し、蒋介石を始めとする中国国民党中央機関が広州に追い詰められたその時に、彼は自ら命を絶ったのである。残念無念であったでだろう。

Ⅲ. 戴季陶主義

戴季陶による三民主義の理解・解釈のことを戴季陶主義と言う。彼は「孫文主義の哲学的基礎」とその付録「民生哲学系統表説明」、「孫文主義の哲学的基礎と題する講演」、「国民革命と中国国民党」[21] 等で詳しく論じている。それを要約すると凡そ次のようになる。

三民主義は救国主義である。

国を救うにはその国の民族が自分自身の文化の価値を認め、それに誇りを持ち、それを絶えず改造し、一段と素晴らしい新しい文化を創造して行く民族の自尊心と自負、自信が必要である。

それが民族の精神である。

中国民族は固有の倫理・道徳・思想・哲学・政治を具有している。それが儒教である。儒教は中国民族がそれまでの3千年の間に造り上げた文化の結晶である。

儒教は人間性を出発点としている。人間は生存の欲望を本能として持っている。衣・食・住・行・育・楽の六つであるが、基本となるのは食欲と性欲である。食欲を満たすための社会の経済生活に注意するだけでは足りなく、所詮は性欲から来る血統の、民族の生存競争にも充分どころか、前者以上に関心を払ってこそ完全になる。欲望の性質から言って、どんな欲望にも独占性・排他性・統一性・支配性がある。

人間は一人では生きて行けなく、社会の一員となってはじめて生存が可能である。社会の一員となるための道徳の根本・基礎が仁愛である。仁のために知を求め、勇を以て仁を実行する。決心して、終身努力する。それが誠で、物事に就いて最善のことを知って択び取り、それを固く守って身に付けておく。というようなことが、中国民族に限らず、全人類が生存する力の基本であり、原動力であって、革命時代には特に欠かせない国民の精神、民族の精神である。

孫文の思想は「能作」（やり得る）と「所作」（やるところ）の二つに分けられ、前者は道徳の主張であり、古代中国の正統の倫理思想を受け継いだもので、何時になっても変わらない。中国民族には文化を創造する能力もあれば、国を造り、社会を組織する能力もあるという確信である。後者は政治の主張であり、現代世界の経済組織、国家組織、国際関係等種々のシステムを考慮して構築する理論で、時代と民族によって変わるが、中国民族は発奮して、近代科学や文明を吸収すれば、必ずや欧米日先進諸国に追い付き、追い越せる。

これ即ち「物格して后知至る。物至りて后意誠なり。意誠にして后心正し。心正しくして后身修まる。身修りて后家齊ふ。家齊ひて后國治まる。國治まりて后天下平かなり」[22]である。

三民主義は並立した三つの部分からなっているのではなく、本体から言えば民生主義唯一つであり、方法から言ってはじめて、民族・民権・民生の三つの主義があるのである。民生は歴史の中心であり、仁愛は民生の基礎である。三民主義の目的は中国乃至全世界を民生主義の新社会、完全に民有・民治・民享の社会にすることである。

以上要約したことを彼自身の言葉を借りて更に一言に纏めればこうなる[23]。

「天下の達道は三、民族なり、民権なり、民生なり。之を行ふ所以の者は三、知・仁・勇なり。知・仁・勇の三者は、天下の達徳なり。之を行ふ所以の者は、一なり。一とは何ぞや、誠なり。誠なる者は、善を択んで固く之を執る者なり。」

戴季陶の強調するところは革命の手段・方法である。彼は徹底して階級の対立と階級闘争に反対する。「中国の革命と反革命の勢力の対立は自覚者と未自覚者の対立であって、階級の対立ではない。故に、我々は国民全体の自覚を促すべきであって、一つの階級の自覚を促すべきではない。」[24]彼は中国何十年来の革命を振り返り、革命者は抑圧・支配されている階級の出身ではなく、大半は支配者階級に属していると言う。中国のような国に於いて、生活に余裕がない人には革命の知識に接する機会もなければ、それを身に付け、目覚めることなどできない。結局は、知識を得て、革命的に自覚をし得た人が大多数の革命的に自覚できない人のために、革命をやる訳である。孫文もそう考えていた。

「世界の人間は3種類に分けることができる。一つは先知先覚で、一つは後知後覚、もう一つは不知不覚である。先知先覚者は発明者であり、後知後覚者は宣伝者であって、不知不覚者は実行者である。」[25]

もともと「知」を手にするということは「行」する、実行するということよりも難しいというのが孫文の「知難行易」の説である。ある意味では確かに常識で言う、その反対の「知易行難」説より奇抜に見えるかも知れないが、中国の事情から言えば、人口の8割以上を占めるのが農民で、それがほとんど読み書きなどできない文盲である。その人たちを目覚めさせるのは容易なことではない。孫文は自分自身の経験からそう思うようになったのは自然なことである。

魯迅が「故郷」で描いた「閏土」が典型的な中国の農民像である。「深い苦痛を感じているが、それを言い出すすべがない」、「沈黙して」いて、「苛酷な税金、兵と匪と官と紳とが、よってたかって彼を苦しめ、彼をでくのぼうみたいな男にしてしまった」。2千年もこのような状態に置かれた農民や労働者、要するに被支配者階級の人たちに自分自身の利益のために立ち上がり、革命に参加するようにしてもらう。

地主や資本家の人たち、要するに支配者階級の人たちにも目覚めてもらい、支配されている人たちの利益のために革命に参加してもらう。革命に未だ参加していないものは知らない、目覚めていないからであって、知ることができたら、仁愛性を発見することができ、被支配者階級のために尽力するであろう。

孫文の狙いが正に、各階級の人たちに、その階級性を放棄し、国民性を回復し、野獣性を放棄し、人間性を回復してもらうところにある。言葉を換えて言えば、支配者階級の人たちにその特殊な階級的地位を放棄し、平民と一緒になって民生主義のために、人民の生活・社会の生存・国民の生計・大衆の生命のために、奮闘努力してもらうということである。

国民革命とは各階級連合の革命である。

中華民国、台湾は、この三民主義を信仰し、中国国民党の指導の下で、短期内に近代化を成し遂げ、生産性を大々的に向上させ、国力を伸ばし、国民の生活を先進国並みのところまでレベルアップしたのである。経済の高度成長だけでなく、政治の民主化も実現しつつある。

中華人民共和国、中国大陸は、マルクス・レーニン主義と言いながら、毛沢東の「不断革命」から、鄧小平の「四つの堅持」、江沢民の「三つの代表」とその色合いを徐々に薄めつつ、「階級闘争」を「市場経済」に変え、共産党を私営企業の実業家まで入党できる全民党に改造し、ようやく全土を近代化の軌道に乗せることに成功した。政治の民主化はまだまだ先の話である。

戴季陶は「共信不立、互信不生。互信不生、団結不固。団結不固、不能生存」[26]と声を大にして、中華民国を愛する中国国民党員、三民主義の信徒に連帯を一生呼び掛けた。

Ⅳ. 民族精神

1. 民族の自信

戴季陶は、一つの団体、その団体の運動、一人の政治家、その活動、一代の政治運動にとって、若しも統一性と独立性を失い、自信を失ってしまったら、結果は必ず失敗であるだけでなく、

「統一性無く独立性の無い運動は、社会各種階級、各種組織に対し、目的の無い破壊を生み出し敗滅に終るのみであって、又自信力を失った社会からは如何なる道徳も、如何なる制度も、之を育成することは出来ない」と指摘し、更に「一民族生命の最も肝要な事はその統一性と独立性であり、而かも此の統一性と独立性の生成に最も大切なのは、かの自信力に在る」と民族の自分自身の能力や存在価値に対する確信をこの上になく強調する[27]。

彼は「信仰は生存の基礎であり、自信力は活動の根幹である」ということを信じて止まず、日本民族が強い所以と、中国民族が弱い所以はつまりここにあるのであって、「日本が何故に強いか、如何にして統一を完成し得たか、何を以て欧州の文化を吸収し之を同化して日本統一の民族文化としたかと云えば是れ全く日本民族の自信力に基因するものである」と言う[28]。

日本民族は日本独自の政治・経済・社会・文化、思想・道徳・学術・制度等、要するに広い意味での文化の創造と発展に強烈な自尊心・プライドを持ち、極東に於いては中国民族を除いては最大の民族で、欧米先進諸国に比べても引けを取らないという確固とした存在意識を具有している。

「若し日本の史籍から中国、印度、欧米文化の凡てを取り除き、赤裸々に日本固有の本質のみを留めしむるならば想うに南洋の土人と何等選ぶ所は無いであろう。……彼等は此の丸裸無一物の民族を以てして海上より流れて日本島に来り、繁殖発展して土人を平定し、強大な部落を造り、土着と外来の多くの民族を支配し且つ彼等を同化することが出来た。更に、朝鮮、支那、印度から各種の物質的精神的文明を輸入し且つ之を悉く消化して、自己の生活に適応せしめて一種の特性を造り上げ、其の国家組織を完成することが出来た。更に進んでは此の力を基礎とし、欧力東侵の時代を迎えて、西方伝来の科学文明を接受し遂に現代の勢力を造ったのである。」[29]

「若し欧州伝来の科学文明と中国、印度より輸入された哲学宗教思想を除けば、日本固有の思想は即ち幼稚なりと云わざるを得ないであろう。併しながら此の事は日本の恥辱とすることは出来ない。且つ其の幼稚な点こそ彼が蓬勃として進取の精神と発展の余地とを有する所以で、決して衰頽の象徴を示すものではない。」[30]

この自信力、進取の精神、創造の精神こそ日本の民族精神である。

2．民族精神の形成

日本民族の固有の信仰は神道で、自然崇拝や祖先崇拝等色々な信仰形態があるが、部落権力の漸次拡大、諸部落の統合につれて自ずと一種の調和的理論と組織的体制が必要になり、6世紀半ば頃から、入って来た中国文明の影響を受けて、例えば教養体系等随分充実した。儒教文明と同時に中国を経由した印度の仏教文明も日本に伝わって来た。但し、これは二つの異なった思想であり、政治的にも社会的にも容易に調和されなかった。「一は世界無差別を唱道し、他は九族親疎を分かつ。一は冤親平等を主張し他は名を正し、分を定め、礼を厳にし、刑を重くせんとする。」[31]これが仏教伝来の第一期の神仏対立期である。

第二期が神仏混淆期である。何某かの神は何某かの仏・菩薩の権現であるとする本地垂迹説等が造り上げられ、神仏の対立が調和され、混合信仰が生まれる。

漢字の進歩、封建制度の完成、武家勢力の膨張により、神道は又台頭し、更に明治維新時代に

至るや「日本三島的封建制」から「地球的民族封建制」へ移行し、廃仏毀釈の仏教排斥運動が起こる。

千年以上もの長い間に、奈良時代は鑑真、平安時代は最澄・空海、鎌倉時代は法然・栄西・親鸞・道元・日蓮、室町時代は蓮如等の名僧が輩出し、大活躍しただけでなく、日本の社会の需要に応じて、外来の仏教文明を同化し、独自の仏教文化を造り上げた。戴季陶は幾つかの例を挙げている[32]。極めて平和的な仏教を封建時代の人心に順応して強性的な仏教にしたとか、巧妙な文字排列の諸行無常の思想の表れである伊呂波歌を作り出したとか、豆腐・湯葉・乾し納豆・漬け物・麩等僧侶の常用品であった飲食物を普及させたとか、謡曲は仏教の古事伝説から題材を多く採ったとか。「彼等の仏教は貴族の間に在っては確かに多大の積極的犠牲精神を意味しているし、民間方面に在っては又少なからざる人情世態的趣味を含有して居て、中国の堅苦枯寂なる仏教と比較するとそこに大なる差異を発見するであろう。」[33]

戴季陶は中国文明の日本への輸入過程を二つの段階に分けて論じている[34]。前段落は完全に唐制の公家時代、統一し、発展した盛唐文明を模倣したもので、その最も成熟したのが平安時代の文化である。一般大衆が受けた中国の文化は被支配的法令、被宣伝的宗教に過ぎず、盛んになった浄土美術と言い、その静的・感覚の優美さ・繊細さと言い、統一的典章制度と学術的宗教信仰の二種の極めて艱深な文化から成熟した芸術は貴族専有のもので、範囲が狭く、気力が微弱であった。唐風が薄れ、国風に変わりつつ、文化は爛熟に向かうが、忽ち腐敗、破産し、公家制度は衰退、群雄争覇の時代へと突入して行った。後段階は江戸時代で、町人文化興起、発達した。始めは大阪、後には江戸が中心となり、中央と地方の交流も頻繁で、文化の普及が急ピッチで進んだ。元禄文化、特に化政文化は空前の巨観を示し、隆盛を極めた。民間文学、民間芸術を始め、全ての文芸は豊富な実生活の情緒を含有し、人間性に富み、人情味に溢れた。と同時に、制度文物も人情を以てその骨子とした。そして、次のように結論付ける。

「統一的公家制度から変じて分裂した封建制度となったのは、中国の歴史に比較して誠に退歩の感があるが、実は当時の日本社会組織と文化普及の範囲より観るに、封建制度の発生は、各地方が夫々文化を需要し之が普及を要求したからであった。故に之より後、徳川三百年の治世はただに日本民族の勢力を結合したのみではなく、曩に京畿一帯の少数貴族の手に壟断されて居た文化を一般に普及したのである。」

日本人はこのようにして長期に亘って紆余曲折しながらも、中国、印度の文明を咀嚼消化し、日本の社会や風土に合うようにそれらを改造し、文明発達、組織進歩、国力増大、常に日本民族の特色ある文化を造り上げた訳であるが、それと同時に民族の自信も付いて来、その結果独立の思想を要求し始めた。山鹿素行、吉田松蔭等の古学派が再び振起し、「神道国家」、「君主神権」を鼓吹するようになったのは至極当然のことである。徳川時代はこの古学派の神権思想の復興の他に、和蘭学問の輸入、漢学の発達があるが、古学派の中心思想は儒教であるし、和蘭学問は精神科学の面では日本の文化に何等の進歩を齎らさなかったので、結局「漢学の発達が、思想上に於ても統一的制度文物の上に於ても日本近代文明の基礎となった」[35]。古学派や漢学者が中国の哲学思想から得た最大の利益は仁愛観念と天下観念であると戴季陶は指摘し、「徳川時代の統一的政治は全部の日本をして所謂車、軌を同うし、書、文を同うし、行、倫を同うする時期に到達

せしめたもので、儒家思想の発達と明治初年の民権思想の発達とより観察すれば、吾人は日本近代文明の進歩が恰かも仁愛観念の進歩と正比例を為すものであることを容易に知り得るであろう。而かも此の仁愛観念発展の原因は全く、政治的統一と、物質文明の進歩と、社会組織の整理とに在った。」と続け、徳川時代三百年の治績を高く評価し、徳川時代を以て日本民族精神が最終的に形成したとするのである。

3．武士道

江戸幕藩体制下には天皇・公卿・将軍・藩主・士農工商の四民、穢多・非人等の階級・階層が存在したが、その中武士は社会組織の中堅であり、政治的、経済的、社会的、文化的に果たした役割は極めて大きい。武士は所詮藩主に仕え、大地主としての藩主のために、実際農奴である農民を支配し、外侮を禦く僕人である。藩主と武士、藩主の家系と武士の家系とは従属関係にあり、「主家の為」とは藩主の武士自身の家系・家名のために奮闘することである。その武士の道である武士道は一種の「奴道」であり、武士道の観念は即ち封建制度下における食録報恩主義に過ぎない、と戴季陶は指摘する[36]。

ところが、古学派の山鹿素行や大道寺友山等がその講義や著書「武家事紀」、「中朝事実」、「武道初心集」等を通して「武道」、「士道」に神権的民族思想だけでなく、儒家道徳の魂を入れ、それまで言わば制度論としての武士道から一歩進めて道徳論としての武士道、更に進めて信仰論とてしの武士道に仕上げる。武士の社会的責任は加重せられ、地位も大々的に増高し、武士は名実共に支配階級の一員になる。武士道や武士の行為、武士の特色である「生死を軽んじ」、「然諾を重んじ」、「意気を尚ぶ」等の性格が社会の賛美の的になったのは言うまでもない。「此の性格を思想上、学問上より奨励し、完成せしめたのは徳川時代の哲学思想の特色で、且つ日本古学派哲学思想の特色である[37]。「赤穂藩より大石良雄の如き者を出したのは全く山鹿素行の教育を受けた結果に外ならない。……日本の尚武思想、軍国主義が決して中国思想、印度思想に由るものではなくして偏に日本宗法社会の神権迷信より由来したものである……日本人の風俗習慣と支那人の夫とを比べて最も其の異れる点は、日本人が如何なる方面に於ても晋朝の人、清談して責を負わず、六朝の人、軟弱頽喪なりと云う様な支那人の堕落性癖を持って居ないことに発見せらるるのであるが、最も消極的な浮世派文学芸術に於ても殺伐な気分を含むこと少なからず……。」

明治時代に至っては旧道徳論、旧信仰論の武士道に維新革命の精神を加え、又欧州思想も融合し、遂に維新時期の政治道徳の基礎を造り上げた。

武士は名教宗法の特色を含有すると同時に、一種の人情的世態的要素も具備し、高尚なる武士生活は血涙生活とも言え、血は主家に対する犠牲で、涙は百姓に対する憐愛である。徳川時代の武士道は生活情趣にも富んでいる、というふうに戴季陶は武士道を礼賛する。

「封建制度に於ては此の種の家系保存の為にする努力、奮闘は彼等社会の最も賛美する所のもので是れを以て道徳の極致、人生の真意、宇宙の大法とした。斯くの如くなるに於てこそ、最高の人格にして神と同体となり、仏と同化し、宇宙と共に存し得るものと考え其の神秘的であればある程、悲哀的であればある程、社会は之をより多く賛美したのである。彼等が挙国一致を以て賛美する所の武士道の精華を事実上より説明すれば『仇討』と『切腹』の二事実を挙ぐることが

出来る」[38] と述べ、仇討ち、切腹、特に「助太刀」を詳しく分析し、武士道に含まれている正義の精神を褒め称える。

武士道は日本の民族精神と国民性の端的な現れである。

4．明治維新

武士が中心、主力となって成し遂げた明治維新は正に日本民族精神の大勝利である。明治維新で日本は幕府を倒し、天皇制を回復し、尊皇攘夷から開国進取と方針を急転し、近代化の実現に大きく前進した。その原因に就いて、戴季陶は次の五つを挙げている[39]。

(1) 徳川幕府自身の腐敗

(2) 幕府及び各藩の財政困難と幕藩武士の生活難

(3) 外国勢力の圧迫と攘夷倒幕の国民感情

(4) 薩藩・長藩の幕府への不満と尊皇攘夷の有利な条件

(5) 古学派神権王権思想の普及及び漢学発達の影響

当時日本は既に窮極必変の時代に到達しており、外因は促進剤、触発剤に過ぎず、本質的なのはやはり内因である。明治維新は王政復古統一の政治運動であると同時に、人権の自由平等の思想革命でもある。この革命は人類固有の同情互助の本能的発展であり、而も欧州自由思想、特にフランスの民権思想、ルソーの民約論を模範・手本とした。

「日本の改革は断じて大多数農民、或は商工業者の思想行動に依りて起こったものではなく、完全に武士一個の階級のみに依って発動した事業であった。……世界的人類同胞思想は前期後期共に外来思想の感化に依って起ったもので其の内、世界的人類同胞思想は、中国儒家思想が政治及道徳の世界大同理論を与え、仏教の衆生平等思想が、世界大同の信仰を与えたことによるものであったが……民権思想と欧化主義とは維新後の特産で、此の新しい民権思想、自由平等博愛思想は日本の後期的世界人類同胞観念と称し得るであろう。」

明治維新が成功した原因も自ずと二つに絞られる。一つは時代、社会的に切実な要求があったこと、一つは人民に共同の信仰があったこと。要するに、日本民族の統一的発展能力が既に確実に具備していた。もっとはっきり言えば、民族的統一思想、統一信仰、統一力が明治維新成功の最大の原因である、と戴季陶は断を下す[40]。

非常に興味深いのは攘夷と開国、互いに矛盾するこの二つの傾向が共に日本の近代化の基礎になったということである。日本人は欧米諸国の学問が進み、科学が発達し、経済も成長し、国力が強いということを熟知しており、攘夷を唱えながらもその学問を歓迎し、学ぼうとしていた。それで、幕府が倒れるや否や忽ち尊皇攘夷の目標・方針を開国進取に切り替えたのである。事情は全く違うが、中国共産党・政府は鎖国から開国、計画経済から市場経済に切り替えるのに実に30年もかかり、中国の近代化を大々的に遅らせた。

V．社会心理

1．熱烈で真実な信仰

戴季陶は日本の民族精神、自信力は何に依るものであるかを名作「日本論」の「第22章　信仰の真実性」で詳しく論じている。そして、日本人と比較しながら、中国人に痛烈な批判を加えている[41]。

彼は先ず理知・思想と信仰の関係を分析する。前者は客観的な事実に対する観察や判断に依るものであるが、「観」であり、静的で、冷静である。情感が理知の陶冶を受け、醇化して始めて信仰になる。後者は「行」であり、動的で、熱烈である。醇化しない情感もあるが、それは文明の作用ではなく、力が生命の最後の一瞬まで続く。ここからも日本人の信仰の真実さ、力の強さが世界の他民族の比ではないということが分かる。

戦争史上打算のかけらもない、信仰から生まれる強大な力の例は枚挙に遑がない。日露戦争で必ず死ぬということを知りながら、自分たちの乗っていた軍艦を爆発沈没させて敵の旅順軍港を封鎖した事件は有名である。ところが、士卒が10何円のために、官長が財のために、子女が玉帛のために、何れも打算を以て全部の意義となす戦争は生命をあまりにも軽蔑するものである。中国人が過去千何百年の間に周りの強蛮、小民族にさえ勝てなかった所以は悉くここにあり、今回の北伐戦争も長江に至るや破綻が生じたのは英国や、日本、共産党の圧迫のせいであるのは言うまでもないが、腐敗堕落した社会に勝てない、打算の因習が破れないのも大きな原因である。これは中国民族の通弊で、これを一掃し得た者は誰でも成功する。

2．美を好む

戴季陶は美的生活の重要性、日本民族の美的生活の特質及び形成に就いて、「日本論」の第23章で要領よくまとめ、ここでも日本人・日本文化を高く評価している[42]。

社会を人間の体に例えれば、社会制度は骨格で、生活機能が肉体である。その生活機能の主体は言うまでもなく生存意識、信仰生活であるが、生活の情趣、美的生活も不可欠であり、それは生活の推進力になる。革命とは社会制度の改革であるが、往々にして信仰・美的両生活が先に変化し、社会制度の変革を促し、革命を起こす。新社会制度が樹立しても、両生活の変化は止まらず、更に新しい社会制度の改革を引き起こす。このようにして、時代は変化し、社会は進化する。戴季陶は政治・社会体制の変革の原動力を経済・モノよりも意識・ヒトに見る。

美を好む、「是れも亦信仰と同様、民族の最も基本的な力である。此の二つの力を有する時は民族は必ず克く強盛、克く発展し得るものであって、此の二つの力さえ失わなければ民族は決して衰亡するものではない。」

「美は人類文化の最大特質の一で、又最大要求の一であり、美の意義を除却すれば人類文化の原素を尋ぬるに由がない。……人類に於ても、美術の進歩し普及した民族は文化創造能力の最も大なる民族である。」

「人が若し美を好まず、審美を知らないとしたら此の人の一生は最も憐れむべき一生である。一民族が若し好美の精神を捨てたならば、一切の文化は次第に後退し、生存能力も亦、漸を逐う

て消失するであろう。美は、生存意義中の最大、最高、最深の一意義である。」

「道徳上に於ける好美の関係は更に重大である。」

というふうに、彼は先ず美的生活・美意識の民族の発展、文化、人生、道徳に於ける位置付けを明確にし、続いて次に日本人の「美の世界」論を展開する。

日本人の美的生活の著しい特質は、一つは戦闘精神、超生死的な力であり、一つは優美閑静な意態、精巧細緻な形体である。前者は好戦国民の戦闘生活の結晶で、後者は温帯島国の美麗な山川風景の表現である。時代的に言えば、前者は武家時代の習性で、後者は公家時代の習性であるし、地域的に言えば、前者は東国と西南国の短衣を表現し、後者は京都の長袖を表現する。この二つは全く相反する特質である。これがつまり日本趣味である。

「日本人の芸術生活は真実にして、彼は芸術の中に彼の真実にして虚偽なき生命を体現し得る。」

「日本の審美の程度は、外の国民に比較して高尚且つ普遍なりと云い得る。」

日本人は中国人に比べて、その審美の情緒が優美豊富で、特に自然美に対する賞玩には独特の微妙な情趣がある。庭園・盆栽・生け花に潜む特殊な想像力と創造力とは死物に生意を添えるものがある。彼が言う「乞食にまで窮した僧侶が、古韵悠揚たる尺八を吹くは之を吾人の聴く宣巻に比すれば数十倍の深さに於て中古時代の歴史を耽想せしむることを得る」は彼が日本文化に陶然と酔っている証拠である。私は中国の有名な政治家や学者を何回も京都の御所や二条城、修学院離宮等に案内したことがあるが、感動もしなかったし、興味も示さなかった。酷い場合は「なんだ、こんな古くさくて、ちっぽけな」という表情であった。

動物的本能作用に過ぎない。然し、情感に欠けている人間には何時まで経っても理知を創造することはできないし、情感に欠乏する社会も生活の団結を作ることはできない。「一個人一社会の創造進化は共に此の醇化の情感から推進せられ、組織せられ、調和せられるが、その程度と方面とは同じでなく、その作用のみは同一である。信仰的生活は個人と社会の進歩団結上、最大の機能である。……冷静な理知が、化して熱烈な情感とならぬ場合には、決して力を生ずることはない。」

日本民族が何故このように正気勃々として、不断の向上発展を続けられるのか、その原因は正に日本人の熱烈で真実な信仰生活にある。「自彊息まず」は自信力の働きで、「厚徳載物」は自信力の効果である。信仰がありさえすれば、不滅であり、衆を合することができる。

次に彼は打算に就いて分析する。人生に打算を考えては行けないというのなら、科学は無用の長物になろう。但し、人生に於いて専ら打算にばかり頼っていたら、先ず古今東西にて打算が完全に達せられたという試しがなかったことを知るべきである。打算は単なる生存の方法で、打算しないということこそ生存の意義である。信仰には打算がなく、又打算をしては行けないのである。打算したら最後、信仰にはならなくなる。

ここで彼は中国人に猛烈な批判を浴びせかける。「『水に入ればて命を思い、岸に上がれば財を思う』と云うが打算的民族が、何処から奮闘的精神を生み、何処から永久的歴史を創造し、又何に従って思想、行為を徹底的に究めることが出来ようか。心に共産革命を想い、口に国民革命を叫び、手に個人主義的生涯をおくる。此の矛盾した虚偽の生活は打算から生じた誤謬である。」

彼は「支那人の事は悪い方を以て考えれば必ずあたる」との言い方に賛成で、それを中国人の亡国性の現れとする。

それに比べ、日本人の信仰生活は遙かに純潔で、積極的であり、打算がない。日本人の犠牲的精神は正にこの信仰生活から訓練せられて生じたものである。宗教は一つの信仰であり、信仰が必ずしも宗教とは限らないことは自明の理であるが、宗教の大多数の信徒の「物質的無常観」は極めて積極的な「精神的常往観」の上に立っている、と日本人に最大の賛辞を贈る。

このような信仰は社会の実生活の種々相、特に男女の恋愛と戦争から見て取れるとし、それらについて詳細に叙述する。

中国人の男女生活は実に枯寂悲哀極まりなく、その家庭に熱烈な愛の結合の痕跡等見当らないは言うまでもなく、訳の分からぬ男と女、情夫情婦の自由結合さえも冷たい打算による。男女の関係は人類生命の中では一番のポイントであり、その「生」の意義は大きく、それと比べるのは「殺」の意義が集中している戦争しかない。生死の過程の中での「食」よりもその意義は大きい。性生活の虚偽と打算は生存の意義の錯誤であり、消失である。一つの民族が男女の関係を遊び事と見做すようになったら、その民族の生存の意義は衰弱したと言えるし、男女の関係に打算しか残らないようになったら、その民族の生存の意義は完全に消失したと言える。何と辛辣な批判であろう。中国人が自分自身の民族をここまでこき下ろしたのは魯迅の阿Qを除いて外に類を見ない。

日本には情死が多い。自分のため或いは二人の共同の目的のためではなく、専ら愛する相手のために、犠牲になる。たった二人の絶対的な愛の小さな世界のために、全ての世界を捨てるのである。花柳社会に最も多く、その次に多いのが異なる階級に属する男女である。打算が一番多いはずの境遇にありながら、多くの男女が一切合財の打算を捨ててしまうのである。このような「超世間的な性生活」、熱烈なる性愛と優美なる同情という超性的な生存意識は利己的で、堕落懦弱な放縦貪淫な性生活にうつつを抜かす男女には想像もできない。中国の歴史にはこういう例がない。これ正に日本民族の信仰の真実性の表れである。

自殺にも同じようなことが言える。自殺はもともと最も懦弱な、最も愚鈍な行為で、最も自信力なき行為であるばかりでなく、最も生を貪る結果である。日本は世界で自殺が一番多い国である。日本にもこの類の普通の自殺があるが、変わってているのは観念が全然違う。日本独特の自殺があるということである。それが切腹である。切腹は苦痛の最も大なるもので、積極的で、努力してはじめてその目的を達し得る自殺の方法である。物質無常と精神常往の観念が明晰にその意識に現われ、思想から生じた信仰、信仰から生じた美の観念を徳性、品格から分析すれば、偉大・崇高・幽雅・細緻となるであろう。日本に欠乏しているのは自ずと偉大・崇高、就中偉大であるが、幽雅・細緻に於いては諸民族諸国民の中でも群を抜いている。

日本民族の美的生活と美意識は少なくとも 2 千何百年の長きに亘って形成されたものである。日本美術の成分は極めて複雑で、中国と印度の美術がその最も基本的な要素であることは疑いがないが、その中で肝要なことは日本民族の特殊性にある。

戴季陶の日本研究はR.ベネディクトの日本研究より、そしてその結果である「日本論」は「菊と刀」より実に20年も早かった。この胡漢民から「日本人自身の批判より好い」と称賛され、

「日本論」翻訳者の藤島健一より「中国人日本研究の白眉」と評価された日本研究が世の注目を浴びなかったのは誠に残念である。

3．男と女

戴季陶の社会発展史観に拠れば、中国の封建制度は2千年前の秦漢統一で既に崩壊したことになる。但し、北方の「寨子」、南方「堡」のように、同族が集まって居住する部落が今だに厳然として大一統の放任政治下に存在している。法律は中国諸民族の生活を保障することができず、政治の効力もその行動を強制することができない。これに加え、専制的な愚民政策を実施したが故に、腐敗堕落した長江は勿論のこと、諸胡混合する黄河流域、苗民族瑤民族の雑居する西江流域等の文化は封建制度の干渉、政治の訓練さえ受けず、一日一日と野蛮の方に向かって退化している。礼教は腐敗し、屍となって終わった礼教の惰力がそのまま残っている。それに比し、日本は僅かに60数年前に、封建的な体制から脱出したばかりなのに、その文化は中国より遙かに進んでいる。野蛮な喧嘩、名実共に前近代的な部落は日本の内地ではほとんど見かけない。そして、日本社会には中国礼教の美点が残り、日本人は礼教を重んじ、礼教を守っている。と、彼は前置きし、「日本の家庭」論を展開する[44]。

日本の社会を支配する礼教の繁文褥礼は甚だしいが、それらの形式は依然として役に立っており、化石化していない。家庭を見ても、男権の社会で、女性は全然地位がない。三従四徳、良妻賢母が相変わらず道徳の基準になっており、妻は夫に対して絶対服従、絶対恭順であるが、中国みたいに奥に閉じ込め、人に会わせないというようなことはなく、言語行動には相当自由がある。男と女の言葉遣いも違うし、総じて女性は男性に敬語の表現をする。要するに、男女の別が著しく、色々な面に於いて男女が大きくかけ離れているが、中国と比較すると、その相違点がはっきりする。

(1) 中国の男尊女卑は非常に畸形的な制度であり、男が女を虐待すると同時に、女が男を圧迫する。男が面子が丸潰れになるのを恐れ、偽善的に辛抱や隠し立てをするのは極普通のことである。日本の社会はこれと違って、女は男に思いやりがあり、同情する。男は武士道の精神に依り、女を絶対的に護る。一夫一婦制で、偶に妾を囲む人がいても、中国みたいに妻妾同室は決してしない。故に日本人の家庭は中国より円満である。中国の男は家庭内苦を嘗め尽くしているが、日本の男性は一日働いて家に帰って来て、一つはお風呂に入り、疲れを取り、一つは妻から一晩慰めてもらえるので、翌日又元気いっぱい勤めに出られるのである。

(2) 日本には中国のような蓄婢制度はないし、下女を虐待することもない。中国の使用人を冷たくあしらい、虐待するのに対し、日本は家族同然に扱い、一種の温情さえ感じる。

(3) 宗法社会の男系家督相続制と財産相続制が一緒になっているのは封建制度として当然のことであるが、長男の次男以下に対する義務も非常にはっきりしている。これは中国と全然違うところである。

(4) 日本女性の貞操観念も真面目なものであるが、中国と異なるところもある。一つは処女に対する貞操観念は中国のように残酷ではない。一つは未亡人の貞操も要求されるが、但し、中国の如く残酷に娘を死にまで追いやって褒賞をもらうようなことはしない。一つは日本人の芸妓

に対する同情的心理は軽蔑的心理に優り、芸妓落籍して正妻にするのは極普通のことである。

4．民衆心理の急変

戴季陶が「日本論」を執筆・刊行したのは1920年代で、日本の資本主義は急成長すると同時に、その固有の矛盾が早くも露呈し、金融・農業恐慌が起こり、又世界大恐慌にも巻き込まれて行った時であった。1923年の関東大震災が更にそれに輪を掛けたのは言うまでもない。彼はもともと学者というよりも政治家なので、政治・経済の動きには敏感である。そして、ちょうど1927年2月から3月にかけて、彼は6年ぶりに訪日し、肌でその変動を感じ取る。彼は社会矛盾の深化、階級間亀裂の拡大、国民生活の悪化、人心の動揺混乱に憂慮し、日本は「安定より不安定へ、平和より不平和へ」と急変していると指摘し、隔世の感がすると嘆き、警告を発する。以下は「日本論」第24章の、民衆の社会心理を中心にした分析である。

(1) 自信力が減少し、如何なる階級もみな打算的商業心理、即ち「町人根性」に支配されている。江戸時代に経済力を増し、都市文化の中心となった町人は被支配階級に属しながら、支配階級の側の都市に住み、支配階級に寄生していた。「専ら極めて鄙陋曖昧な空気の中に在って世襲的守財の虜となり、性格上にも自然非常に齷齪且つ卑鄙な習慣を生じた。」武士とは正反対の存在で、町人は下賤卑劣であり、信義を軽んじ、金銭を重んじる。武士の回教式の神秘道徳に対して、町人はユダヤ式の現金主義である。卑賤な地位から生じた卑賤な性格、天生の習性、これが町人根性であるが、陰柔にして、残酷性を帯びている。一言で言えば、何事にも打算的である。この町人根性が社会に蔓延すれば、民族精神は必ず衰退し、自信力は弱化する。

(2) 美を好む風習と優美豊富な美意識が減退し、特に大都市では千何百年の年月を経て、中国・印度文明を咀嚼し、日本人の血液に調和し、造り上げた特殊な「日本趣味」はほとんど姿を消した。

(3) 絶え間なく続く闘争により、生活の疲労は極度に達し、能動的な尚武が受け身的な争闘に変わった。社会組織の欠陥が拡大し、全社会には革命的恐怖の空気が充満している。

社会の恐慌は人心の荒廃を引き起こし、人心の砂漠化は社会の不況を益々深刻にするという悪循環に日本は陥ってしまった。壊滅に瀕した危機からの脱出は？出口は？

Ⅵ．対中対策

1．政治方針の誤り

戴季陶は一生の間に何冊かの著書を出しただけでなく、幾つもの新聞や雑誌まで作り、国家と社会、国際問題等に就いて、論文・論評・随筆を相当発表した。その中の一つに「日本政治方針の誤り」という大変重要な論文がある[45]。

凡そ国というものはその国内の諸体制が整い、安定し、国力も付き、存在できるようになれば、その国民は必ず対外的に拡張を図るようになるものであり、これこそ国民の自然の植民性というものである。という考えに彼は賛成であり、これは世界各国の国民発展の法則であると見る。

日本は明治維新後、3千万しかなかった人口が5千万にまで増え、内政も軌道に乗り、陸海軍

の軍事力も増大した。日本が対外侵略を図るようになったのは政治家の野心に拠るものではなく、国民の自然な植民性が原因である。

日本には北進と南進の二つの進路があるが、南進を取るべきである。琉球諸島から台湾へ、ルソン海峡を経てルソン島・ミンダナオ島に入り、続いてボルネオ島に渡り、そこから西のスマトラ島・ジャワ島・セレベス島と大きく迂回し、東のニューギニア島及びその付近の諸島に至る。この広範囲に亘る地域こそ日本の天然の植民地である。日本の勢力圏を太平洋にすれば、東南アジアは風俗慣習が同じの東洋人・黄色人種が経営することになり、西洋人・白色人種が入って来る余地等ない。

次のようなことが理由として考えられる。

(1) 地理的な関係、日本は島国であり、生存を図るには海軍の拡張に依るしかない。海軍が自由、効果的に行動し、外側から本国を防衛するために、何としても海上の島を根拠地にせざるを得ない。と同時に、国民の自然な植民性から、拡張・膨張は不可避で、この絶好の天然の海上諸島植民地をおいてない。日本の地勢は北東はカムチャッカ半島、シベリア大陸と向かい合っており、北の東経143°に沿って走る樺太は極東州に接近している。南は琉球諸島から台湾、マレー半島と続く、太平洋に於いて日本は天然の海上国家で、何人も日本と争うことはできない。

(2) 歴史的関係。自分が南洋を見て回って、日本人の先祖は確かにマレー人であると確信したと彼は言う。立ち居振る舞いといい、服装、言語といい、日本に酷似している。マレーの女性も一見すると日本の女性にそっくりで、マレー人の多くは歯が黒い。びんろうを食べるからである。昔、日本の女性にお歯黒の習慣があり、それを美とした。歌謡の風雅高尚さも流派も日本のに似ている。日本史から、日本人は昔海外から渡って来、原住民族を征服し、高麗を通して中国文明を導入し、その陶冶を受けて現在の民族になったことが分かっている。

日本の政治家の中にも南進論者がいることはいる。1913年11月、桂太郎は孫文との会談で、次のように語っている[46]。

「日本は決して……中国を侵略するような拙策は取らない。大陸を絶対に保障し、全力を尽くして米豪二州に発展するのが日本民族生存・発展の正しい道である。」

1917年6月、戴季陶は秋山貞之に会いに行っている[47]。戴は秋山をこう評している。

「彼は熱烈な南進論者であると同時に、排英米論者である。彼の南進論と排英米論は完全に有色人種の復興に基づくもので、だからと言って、彼は大東洋主義でも、大アジア主義でもなく、大日本主義でもない。彼は人類の平等を主張しているのである。……彼は日本を陸軍の国、ましてや強大な陸軍国にしてはならないと考えている。日本人の運命は米豪二州にある。但し、この目的を達するためには、先ずトルコ・印度・中国の3大民族が完全に独立し、英米の覇権を打ち破り、海上の自由を完全に実現しなければならず、そうしてはじめて大陸間の移住が自由になる。」

ところが、日本政府は南進ではなく、北進とし、海上の発展ではなく、大陸への侵略を方針とした。台湾を手に入れた後に、野心に燃え、次は福建へと向かっている。又朝鮮半島から満洲へと進み、蒙古まで視野に入れている。

こうした方針は絶対失敗に終わるであろう。日本がいくら頑張ったところで限界がある陸軍の力だけでは単独で広大な中国を占領することは不可能であるし、欧米諸国と一緒に中国を分割しようとしても、世界の情勢やヨーロッパ各国の事情がそれを許さない。中国の陸軍も何時かは強くなり、日本の進攻を防ぎ、福建を落とすどころか、台湾も回復されてしまう。満洲を占領することができず、高麗も独立する。台湾が回復されたら、日本の南進の道は塞がれてしまう。大陸への発展も、海上への進取も閉ざされ、アメリカが太平洋を横断して西に向かって来たら、日本は二進も三進も行かなくなる。

中国は東アジアでは一番古い国である。拡張を続けて、大国になったが、それを維持する力が足りず、現在は存亡の危機に瀕している。日本は新興国である。今を措いて、拡張する機会はない。

中国の拡張史を見れば、やはり中華民族は山間部から高原、高原から平野部、そして、大陸から海上と、北から南への進路を取っており、現在既に極南の地域に達している。南洋各地、イギリス・オランダ領にいる中国人は7 百万人にまで上り、商工業はほとんど全部中国人が握っている。将来世界は経済競争の世界になるであろう。政権こそ異民族の手にあるものの、中国人の存在は無視できないであろう。

いずれ中国と日本が大衝突する時が来る！と戴季陶は予言した。それから100年経ち、20世紀末、21世紀初頭になった今、正にその時が来た。彼が「過去に」と言って、民族主義は国家主義に変わり、国家主義は帝国主義に変わる得ると指摘したが、中国は現に民族主義から国家主義に変わっており、帝国主義に変わらない保証はどこにもないのである。日中の間で起こっている諸々の摩擦や事件はその兆しと言えなくもない。

2．蝎形政策

明治維新以降、日清戦争から日露戦争にかけて、産業革命が展開し、資本主義が急激に成熟し始めた。それにつれて、武士を主体とする軍閥及び武士・町人の混合体である財閥が形成された。日本には元来北方、ロシアからの政治的な脅威・抑圧と南方、欧米諸国商船来航に依る経済的圧力があった。ロシアに対抗しようとして起こった攘夷思想は激越的であり、武力的であったが、欧米諸国の圧力に対抗する思想は打算的であり、経済的であった。明治時代に入ってからの日本の国防・外交政策を支配した北進と南進はこの二つの流れの影響を受けており、総じて陸軍は北進、海軍は南進に傾いた。日本政府は結局は北進の方針を選択した。明治維新前後からこれまでの70年の前半はロシアに対して臥薪嘗胆の生存を争う歴史であり、後半はロシアとの中国での争覇の歴史である。

「もともと日本人の対華観念と日本政府の対華方針は誰であろうと似たり寄ったりである。満州での特権及び直魯三特区福建等での特殊な地位を維持し、日本の中国に於ける最優発言権、支配権、特に経済的支配権を維持する。此の幾つかの根本政策に就いては、政界の考えは一致している。然し、国際関係に対する認識の違いに拠り、採る手段と姿勢には大きな違いが生じて来る。」[48]

この方針に基づき、日本が中国の統一を望まないのは当然のことであるが、特に革命勢力が中国を統一するのを好まないどころか、恐怖を感じる。革命はその事実だけでなく、思想である。

この両者は共に同声相応じ、同気相求める可能性があるからである。

「日本の地位と力とは中国の時局を左右する力があり、同時に又、中国一切の事業の進行を障礙し、其の成功を阻止することが出来る。」[49]

勿論それは目的を達するためには手段を択ばずということも含めてである。日本に少しも疑わず、反対もしない者には力を貸し、反対する者はたとえ親日派であっても助けるということはしない。

中国の喉元は渤海湾である。そのためには遼東半島と山東半島を手中にしなければならない。蝎の2本の螯である。ここを押さえておけば、中国の北京・北方を掌握できる。そして、蝎の尾である台湾である。これは中国の南方に睨みを利かせるだけでなく、南進の拠点でもある。これが所謂蝎形の中国侵略の政策である[50]。

第一次世界大戦後、日本は陸軍大将田中義一が政権の座に就き、内閣総理大臣だけでなく、外務大臣も兼ね、この蝎形の政策から更に進み、満蒙への積極的政策を採り、軍国主義の道を突っ走るのである。

註

1）蘇徳昌、現代中国社会に於ける末端組織、奈良大学紀要、第22号、平成6年3月、1ページ。
2）蘇徳昌、中国社会安定のカギ、奈良大学紀要、第23号、平成7年3月1ページ。
3）鄧小平文選、第三巻、人民出版社、1993年10月、317ページ。
4）中國國民黨中央委員會黨史委員會編訂、國父全集、第二冊、中國國民黨中央委員會黨史委員會、844ページ。
5）陳天錫、戴季陶先生文存、中國國民黨中央委員會、中華民國48年3月、1481ページ。
6）同5）、981ページ。
7）同5）、378ページ。
8）陳天錫、戴季陶（傳賢）先生編年傳記、文海出版社、147ページ。
9）同5）、1616ページ。
10）同5）、1617ページ。
11）高軍等編、中国現代政治思想史資料選輯、上冊、第1分冊、四川人民出版社、1984年、407ページ。
12）同8）、50ページ。
13）同5）、979ページ。
14）蔣介石著、寺島正訳、中国のなかのソ連、時事通信社、昭和37年11月、32ページ。
15）同11）、397ページ。
16）同8）、201ページ。
17）同8）、322ページ。
18）同5）、1117ページ。
19）同5）、1450ページ。
20）同5）、331ページ。
21）同11）、399ページ。
22）赤塚忠、新釈漢文大系2、大学中庸、明治書院、昭和42年4月、44ページ。
23）同11）、431ページ。

24）同11)、476ページ。
25）同11)、416ページ。
26）同11)、443ページ。
27）戴天仇著、藤島健一訳、日本論、世界思潮社、昭和21年11月、104ページ。
28）同27)、95ページ。
29）同27)、27ページ。
30）同27)、10ページ。
31）同27)、20ページ。
32）同27)、17ページ。
33）同27)、19ページ。
34）同27)、148ページ。
35）同27)、25ページ。
36）同27)、15ページ。
37）同27)、33ページ。
38）同27)、31ページ。
39）同27)、39ページ。
40）同27)、54ページ。
41）同27)、125ページ。原著「戴季陶、日本論、民智書局、中華民國17年 4 月」では140ページ、第22章になっている。
42）同27)、141ページ。原著では155ページ、第23章になっている。
43）村上菊一郎等訳、世界教養全集7、平凡社、1961年11月、351ページ。
44）同27)、153ページ。原著では166ページ、第24章になっている。
45）戴季陶、戴天仇文集、中國現代史料叢書第一輯、建立民國、呉相湘主編、文星書店、37ページ。
46）戴季陶、日本論、民智書局、中華民國17年 4 月、95ページ。
47）同46)、102ページ。
48）同46)、129ページ。
49）同27)、98ページ。
50）同46)、132ページ。

提要

戴季陶追隨孫文，長期擔任他的秘書，受到他的熏陶，傾倒于孫文。他是中國國民黨右翼理論家和領導人之一。他用儒家觀念來理解和解釋三民主義，認為這才是正統。他的理論成為了蔣介石思想上的支柱。他始終極力反對唯物史觀和階級鬥爭，反對和中國共產黨合作。他認為，思想只有變成信仰才能發出巨大的力量。他從這觀點出發來觀察和研究日本。他指出，日本民族經過一千幾百年的歲月，引進，消化中國，印度和歐美的文明，創造了獨自的文化。到了德川時代、終于形成民族精神，提高了民族自信心，成功地實現了明治維新。武士道起初只不過是封建制度的產物，是一種食祿報恩主義而已。後來不斷擴大，充實其内容，逐漸發展成道德性的武士道，信仰性的武士道。最後又由舊信仰性的變成新信仰性的武士道，成為了日本的民族精神。他對日本人信仰的真實性，日本人好美的國民性，審美能力以及美滿的家庭夫婦關系等大加贊揚，與其同時，猛烈地批判了中國人的劣根性。可惜隨着資本主義的發展與成熟，日本的民族精神衰退，自信心減弱，哀嘆今不如昔。他指責和批判日本軍閥與財閥的侵略中國的政策，指出他們必然失敗。他的『日本論』這一部著作可以稱得上是中國人關於日本的最優秀的研究之一。